



司書名鑑

vol. 30

額賀順子

(特定非営利活動法人男木島図書館理事長)

ぬかが・じゅんこ NPO法人男木島図書館理事長。ウェブデザイナー。WordCamp Kansai 2014、WordCamp Ogijima 2020実行委員長等、WordPressコミュニティーを中心に活動。現在はWordPressのグローバルコミュニティチームにてデプティを務める。著書に『WordPressのやさしい教科書。手を動かしながら学ぶ実用サイトづくりと正しい運用 5.x対応版』、雑誌『せとうちスタイル』『みんなの図書館』にて男木島の生活や文化、図書館について連載中。



瀬戸内に浮かぶ小さな島で、私設図書館「男木島図書館」を運営している額賀順子さん。島民約180人という小さな島に転居したことをきっかけに、子どもたちの居場所、島の人たちの交流の場となる「図書館」づくりに挑戦し、手づくりの運営を続けています。そんな額賀さんに、香川県・男木島への転居までの経緯、ご自身の仕事や図書館づくり、オープンソースコミュニティでの活動からリ・デザイン会議への参加まで、盛りだくさんにうかがいました。

| 本を読むのが好きだった 子ども時代

子どもの頃は、とにかく本を読むのが好きな子でした。逆にいうと本だけあればよくて、幼稚園でも、みんなが遊んでいるときに部屋の隅にある幼稚園文庫のコーナーでずっと本を読んでいるような子でした。

出身は福島県郡山市です。郡山市

には、市立図書館があるのですが、私があまりにたくさんの本を読むので、毎週末母親が自転車で連れて行ってくれています。一つのカードで5冊まで借りられるのですが、母と父と自分のカードを合わせて15冊借りるといったこともしていました。

郡山市図書館(図1)は、いまとなつては古い図書館になるかと思いますが、結構充実していて、私のなかに



図1 郡山市図書館

ある「光が入る図書館がいいな」というイメージには、郡山市図書館の影響があると思います。

| 読むだけではなく、書くことも好き

郡山市には、市内に在学・在籍する中学3年生が自由に応募できる小説・詩の賞「久米賞・百合子賞」というのがあって、これに応募したところ最優秀賞をいただきました。その頃から、自分は本を読むのも書くのも好きなんだと自覚するようになり、文章を書く大学へ行きたいなと、ぼんやりと思うようになっていました。私が調べた限りではその頃文章を書くことを勉強できる大学は、日本大学芸術学部と大阪芸術大学(以下、大

阪芸大)芸術学科の文芸学科だけでした。両方受験した結果、大阪芸大に受かり、進学と同時に大阪へ引っ越します。

| 芝居の脚本執筆にはまる

入学した頃、大阪では小劇場で活動する劇団がはやっていて、芝居向けの脚本を書きはじめたんです。それまで書くことは一人で完結することでしたが、芝居は共同作業でかちになっていくところが面白くて、はまってしまいました。結局、はまりすぎて4年で大学を卒業できなくなってしまったのですが、大阪芸大を卒業した人は大成しないという噂があって、その時点で1回自主退学し

て働きはじめました。でも、社会に出てみたら、やはり大卒のほうがいいと思うようになり、2年間働いて学費を貯めてから大学へ戻り1年通って卒業しました。人生のモラトリアム時期が4年プラス3年の合計7年あったことになります。

|好きなことと仕事は別

社会人を2年経験したことで、書くことで生活するのはすごく難しいと実感していました。そんなときに、仕事にするならこれだなと思ったのがウェブの仕事でした。ネットで芝居の告知をしたり、自分でホームページもつくっていたりしたので、ポートフォリオをつくり制作会社へ持っていき、就職を決めました。よくある就職活動は一切せず、いきなりウェブの世界に飛び込んだという感じでした。

|ウェブデザインの仕事

ウェブの仕事では、わかりやすいのでデザイナーと名乗っていますが、実際に自分がやるのは、ディレクションやコンサルティング寄りの仕

事も多いです。もしかしたらクライアントさんも気づいていないかもしれない本当の目的をきちんと聞き出してかたちにすることを心がけています。ヒアリングだけでなく、ワークショップをする等、少し変わったつくり方をしているかもしれません。そういうやり方ができるのは、本を読んだり文章を書いたりした経験が役に立っているのかなと思っています。

|言葉ではない

表現方法としての写真

ウェブ以外に写真も仕事にしていますが、きっかけは子育てにすごく疲れて、育児ノイローゼみたいになってしまったことにあります。子どもは本当に思いどおりにならなくて、自分を削らないとやっていけない部分があります。出産後、半年で制作会社に復帰したものの、毎週の出張や子どもの夜泣きに悩まされ、自分の体とやりたいこととやらなくてはいけないことのバランスがとれなくなってしまいました。

そんな状況のなかで、文字だけで表現することがしんどくなってしま

いました。そのときに、自分を助けてくれたのが写真でした。写真は、言葉でないものを切り取って伝えることができます。私のなかで言葉と言葉ではない表現としての写真のバランスがとてもよくて、写真を撮りはじめたことで人生が楽になったんです。

英国の図書館で 福島の写真を展示

2011年の東日本大震災はふるさとのことでもあり、自分にとってすごく大きな出来事でした。何かできないかと思ったときに、農地の放射線を測るプロジェクトというのがあり、ボランティアでウェブサイトづくりを手伝うことになりました。その一環で、一般の人は入れない立ち入り禁止区域へ行く研究者の方たちに同行したのです。そのときに撮影した写真を見たイギリス在住の日本人の方から、ぜひ自分の住むまち、エジンバラで展示させてほしいという連絡があり、小規模ですが写真の展示が行われました。その展示会場がまちの図書館、ストックブリッジ図書館(図2)だったんです。それが、場



図2 スtockブリッジ図書館での写真展示

所としての図書館を意識したきっかけでした。図書館はいろいろなことができるということがインプットされたのは、このときだったと思います。

男木島への転居

福島でボランティアをしていたときは大阪に住んでいましたので、ふるさとはあるものの、私自身は福島へ通って活動する「外の人」でした。農地の放射線量の測定も、地元の人々が測れるようになってくると、活動内容は地域での場づくりへと変わっていき、私にできることも減ってきて、少しモヤモヤした気持ちが出てきていました。

一方で、夫の出身地である瀬戸内海のおぎじま(香川県高松市/図4)は超高齢化社会という問題を抱えていましたが、夫も大阪から訪ねる「外の

人」なので、どうにかしたいと思うものの、こちらもまたモヤモヤした気持ちを抱えていました。

2013年、3年に一度のトリエンナーレ方式で開催される瀬戸内国際芸術祭の第2回が開催され、男木島では休校になった小中学校の校舎を使い展示とワークショップが行われました。ちょうどその期間中に、夫が男木島のコミュニティ協議会からウェブサイト制作の依頼を受けて、家族全員で2週間ほど男木島に滞在したんです。すでにフリーランスになり、ほぼリモートワークで仕事をしている私は、そのとき島でも仕事ができると感じました。そんななか、芸術祭のワークショップを楽しんできた当時小学校4年生だった娘が口を滑らせて、「私、この学校に通ってもいいな」と、言い出したんです。その一言をきっかけに、男木島への移住をまじめに検討しはじめました。当時の男木島の人口は約180人で、平均年齢は70歳ほど、子どもは0人。学校は休校になっていました。

｜ 離島の抱えるシビアな現実

夫の実家がありますので、住むと

ころは問題なかったのですが、休校になっている小学校を再開させる必要がありました。これは、思った以上に大変でした。

休校になったとき、「学校に通う子どもがいる家庭が3家族以上あって、新学期の半年前に申し出たら再開校します」という話だったと聞いたので、子どもを通わせたい家族を探してみたところ、すぐに3家族を見つけられました。そこで、8月末くらいに高松市の教育委員会へ電話をかけてみたところ、とても歯切れが悪く「再開校は難しい、時間がかかる」と言われてしまいました。条件を整えば再開校してくれるものだと思っていたので、どれくらい時間がかかるのかをたずねると「10年かかる」と言われました。それを聞いて、私と夫は、行政は学校を開けるつもりがないと感じました。10年経ったら当時10歳だった私の娘は20歳です。10年後に再開校しても、そのとき入学する子どもがいるかわかりません。子育て世代が住めない島は、あとは減ぶしかないわけで、自分たちが思っていたよりも状況はシビアでした。「移住できたらいいね」という簡単な話ではなくて、本腰を

入れてやらなければと思いました。それからは、主に夫が毎週のように大阪から高松や男木島へ通って再開校の働きかけを続けました。そのなかで、「学校は子どもたちのものじゃなくて地域のためのもの。『私たちが欲しい』ではなく『地域が必要としている』という話をもってきてください」という話があったんです。そこで2週間で900筆の署名を集めて提出したところ、高松市長が再開校を約束してくれて、11月の補正予算に盛り込まれ再開校が決まりました。そのときについた予算は7億円でした。なぜそこまで高額な予算が必要だったのかというと、東日本大震災後に学校の耐震基準が上がり、基準を満たした校舎でないと開校できなかったからでした。市としては、3家族のためだけに7億円を使うという判断はできないわけで、地域としての要望が必要だったのです。

| 子どもたちのための 図書館をつくる

それだけお金をかけて再開校したわけですから、わが子が卒業してからも学校を続けなければという思い

が出てきます。そのためには、学校に通う子どもや移住者を増やすしかありません。そこで私が考えたのが図書館でした。

必要だと思ったのは、子どもの学習環境と島の人たちとのコミュニケーションの場でした。子どもたちが図書館に来て、宿題をしたり自分で能動的に知識を得たりする場所があれば、子どもたちのためになりますし、大人も、本を通じてのコミュニケーションがとれるのではないかと思います。「ブックカフェにしないの?」と言われることもありましたが、カフェだと子どもたちが毎日通えません。ですから、私のなかでは「図書館じゃない」という思いがあり、右も左もわからないまま、図書館づくりを始めました。

| 2年かけて図書館をオープン

最初は、半年くらいで図書館をつくれたらいいなと思っていましたが、そんなに簡単にはいかず、結局開館まで2年かかりました。まず、図書館にしたいと思う空き家を見つけて、譲ってもらおう交渉をしようとしたら、権利者が何人いるかわからないうえ

に、探し出す費用は権利者一人ずつにかかることがわかりました。そのとき、はじめて大変なことを始めてしまったと気づきました。結局この権利をまとめるのに1年かかり、費用もあつという間に膨らみました。図書館をつくる予算も300万円くらいだと思っていたのですが、リノベーション費用を見積もったら1000万かかると言われました。離島なので、資材を運ぶにも、大工さんに来てもらうにもコストがかさみます。そんな状況だったので、当初予定していなかったクラウドファンディングで、

本の購入代金を集めることになりました。そして、信用を得るためにも、私に何かあっても図書館を存続させるためにも、NPO組織をつくることにしました。

| 移住したい人のよりどころ

私たちが転居してきたとき180人ほどだった男木島の人口は現在153人です。自然減には追いつけず全体では20数人減りましたが、移住者はこの6年で約50人増えました。80代がボリュームゾーンなので、未来の



図3 男木島図書館

展望はまだ明るいわけではなく、いかに100人を切らずに維持できるかが課題です。娘の卒業後も学校は続いていて、いまは小学生が3人、中学生が2人通っています。2021年度は3人の子どもが入学予定で、未就学児は8人います。

いま図書館は、男木島へ移住したいと思う人が相談できる場所になっています。移住した人に話を聞いてみると、文化的な興味をもっている人がいることがみえたり、文化的素地がある島だとわかったりしたことが大きかったと言われました。

| 誰のための図書館か

私は、地域ごとに求められる図書館像は、本来は異なるものではないかと思っています。男木島図書館をつくろうと思ったときに、「本は1万冊置きたいです」と言ったら、何人かの図書館関係者に驚かれました。「170人の島に1万冊だと、一人当たり約60冊ですね、それは公共図書館からしたらすごい割合です」と言われたのですが、むしろその計算に私のほうが驚きました。私は、一人にとっての選択肢として、その図書館

に1万冊あるのか10万冊あるのかだと思っていたんです。男木島図書館にも1万冊くらいの選択肢は欲しいと思っていましたが、それでも公共図書館に比べたらまったく少ないと思っていたので、一人当たりの冊数で割る計算方法は衝撃的でした。

これは、図書館は誰のためにあるのかという話に通じるとなっています。私は「知の平等」とよく言うのですが、離島でも「知識を得られる」とか「知の平等を得られる」ということを、男木島図書館が少しでも体現できたらいいなと思うところがあります。実際には難しいですし、インターネットのほうがそれを実現できるツールだとも思いますが、男木島図書館はそういうことのシンボルでありたいと思っています。

| オープンソースコミュニティー

先ほど仕事の話をしましたでしたが、仕事と並行してWordPressのオープンソースコミュニティーの活動も続けてきました。私はプログラマーではないので、ソースを書くというより翻訳やコミュニティー活動に関わっています。グローバルなコミュニ



図4 男木島

ティーにはデプティと呼ばれるまとめ役が何人かいるのですが、二人いる日本人デプティの一人が私になります。ボランティアなのでお金にはなりません、こういう活動がつながりを生むこともあるので、それでいいのかなと思っています。

| オープンソースと

図書館との親和性

オープンソースという考え方は、思想の部分で図書館とも親和性があると感じています。WordPressはフリー（自由）であるべきだという思想がとてもしっかりしていて、私もそれに影響を受けているところがあります。そういう部分を、2020年5月

に始まった「図書館」（仮称）リ・デザイン会議の活動にもうまくつなげられないかと考えています。

「図書館」（仮称）リ・デザイン会議の活動は、とても面白いと感じながら参加しています。私は、知識や教育は国の根幹だと考えているので、図書館を運営している人や関わっている人が、どのように思考し、どこへ向かおうとしているのかを知ることが、とても大事なことだと思うんです。そして、もしそこに少しでも関わられるなら、それはとても素敵なことだなと思っています。ですから、少しでも興味がある人は誰でも参加できる活動ですし、みんなが参加したらいいですね。